

みんなの力を合わせて『ポリオの軌跡』を作りましょう

ポリオネットワーク代表 柴田多恵

ポリオネットワーク代表の柴田です。ポリオネットワークの活動もなんと 28 年目に突入しました。こうなったら、最後まで、力が尽きるまで頑張り抜こうと思い、去年は「ポリオの軌跡プロジェクト」を立ち上げ、私が代表になり、毎日頑張っています。

一月末の時点で、ポリオネットワーク会員 35 名の方から原稿が送られてきていて、大変ありがたく思います。一方また、もっともっと多くの「軌跡」を集めたいと、暇を見つけては会員の皆様にお電話をして、お願いをしているところ（今日この頃）です。

皆さん、私からの電話には快く応じて下さり、お互いの近況報告から始まって、毎回相当の長電話になり、とても楽しい時間を過ごさせていただいています。心置きなくお話をしたうえで、「ポリオの軌跡」への投稿をお願いしています。すると、皆さん、ほぼ異口同音に「私の人生なんて、何もない、たいしたことない」「文章を書くななんて・・・無理です」と言って退こうとされます。大変謙虚で、それはそれで一種の美德とも感じられるのですが、そのようにおっしゃる方々にも、あらためて投稿をお願いしたいと思い、この文章を書くことにしました。

皆さんのお話は、すべて後世の人たちのために参考にされ役に立つものになると、私は確信しています。例えば、成長すれば脚長差が出るからと、成長期に「健足には成長止め」「麻痺足には延長」のどちらかの手術をされた方が、とても多いです。あの時代にどういう手術をし、どんな治療をしたのか。また、側弯の手術をされた方の話も聞いたことがあります。書いていただければ、とても意義のある記録になるのではないのでしょうか。

また、身体が不自由なことが原因で被った就学差別、就職差別、結婚差別など。仕方のないものとして受け止め、努力して自分なりに適応ないしは克服し、その間、周りの人たちに助けてもらったことも含めて、「みんなに感謝している、私は幸せだった」と締めくくられる方が少なくありませんでした。でも、あの時長い間皆さんを苦しめた差別という事実は、やはり今一度振り返って、書き残すべきではないのでしょうか。

いずれも私たちの年齢に達すると、ある程度「過去」の事柄になっていて、それなりに「清算」済みなのもかもしれません。古傷に触れるのは嫌だというお気持ちも分かります。でも、是非後世のために書き残していただきたいと、私は強く望みます。

私は、このプロジェクトの趣旨を神戸の中央市民病院の幸原先生にお話ししました。幸原先生は、ポリオネットワーク立ち上げの頃から、ずっと協力してくださっている先生です。先生は「医学的に見ても、『ポリオの軌跡』を残すことはとても意義がある」と賛同し、下記の文章を寄稿してくださいました。